

特15
446

判事 小野 巽 題字
判事補 澤 正太郎 校閱

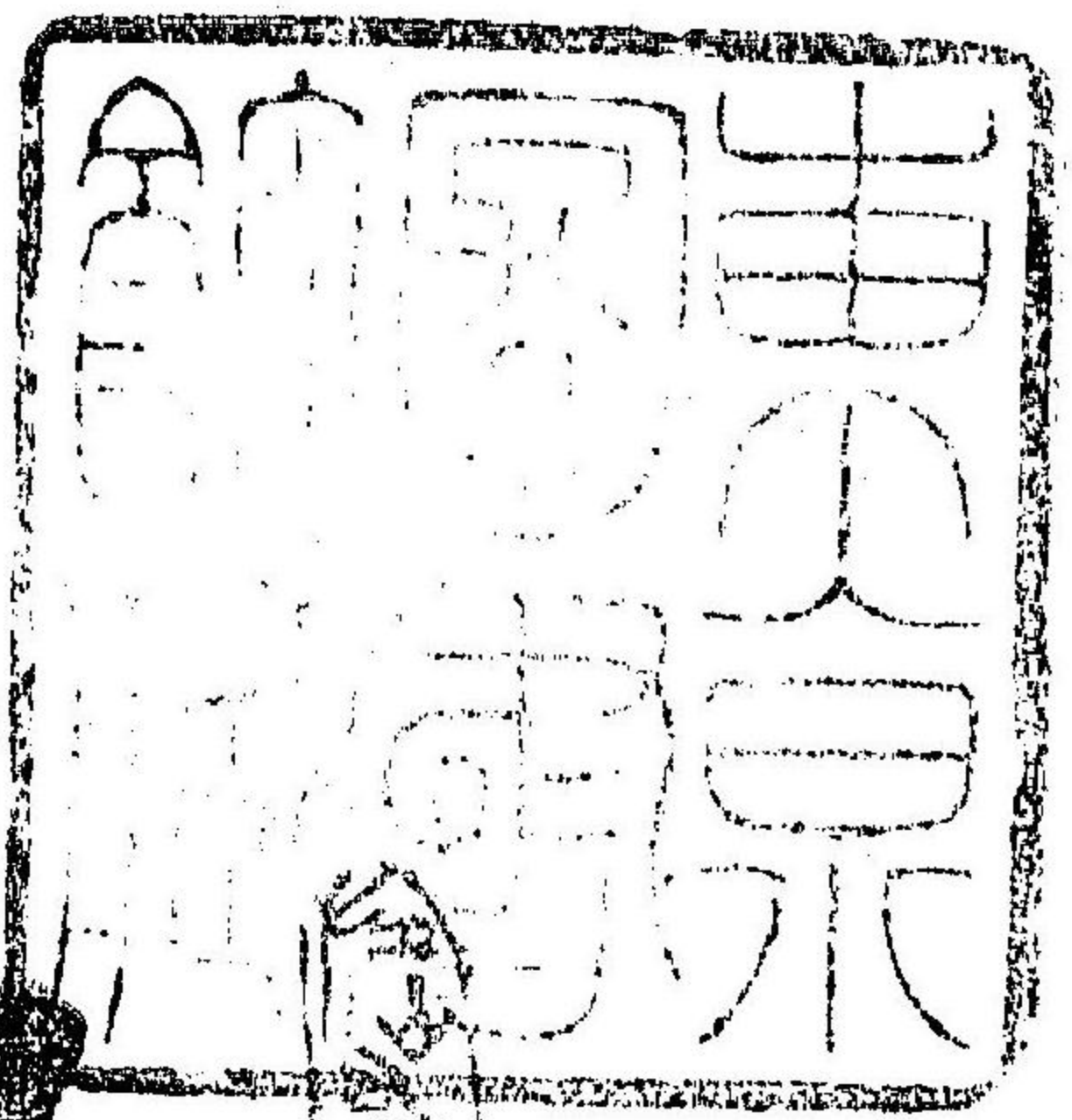
中井 要平 編輯

現行
民事訴訟必讀

全

明治十七年三月發兌

律書房

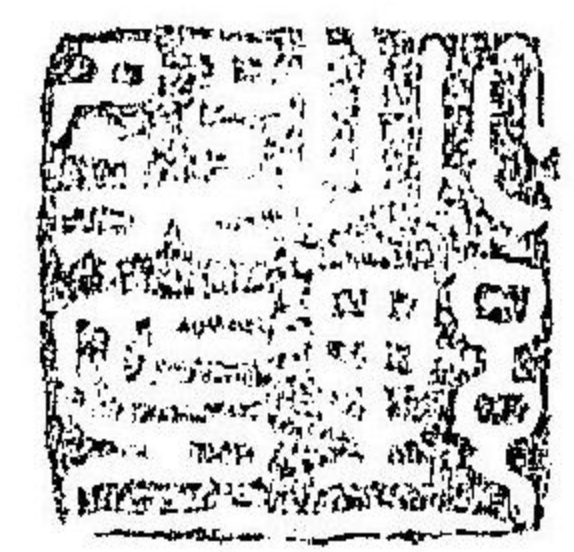


權
義

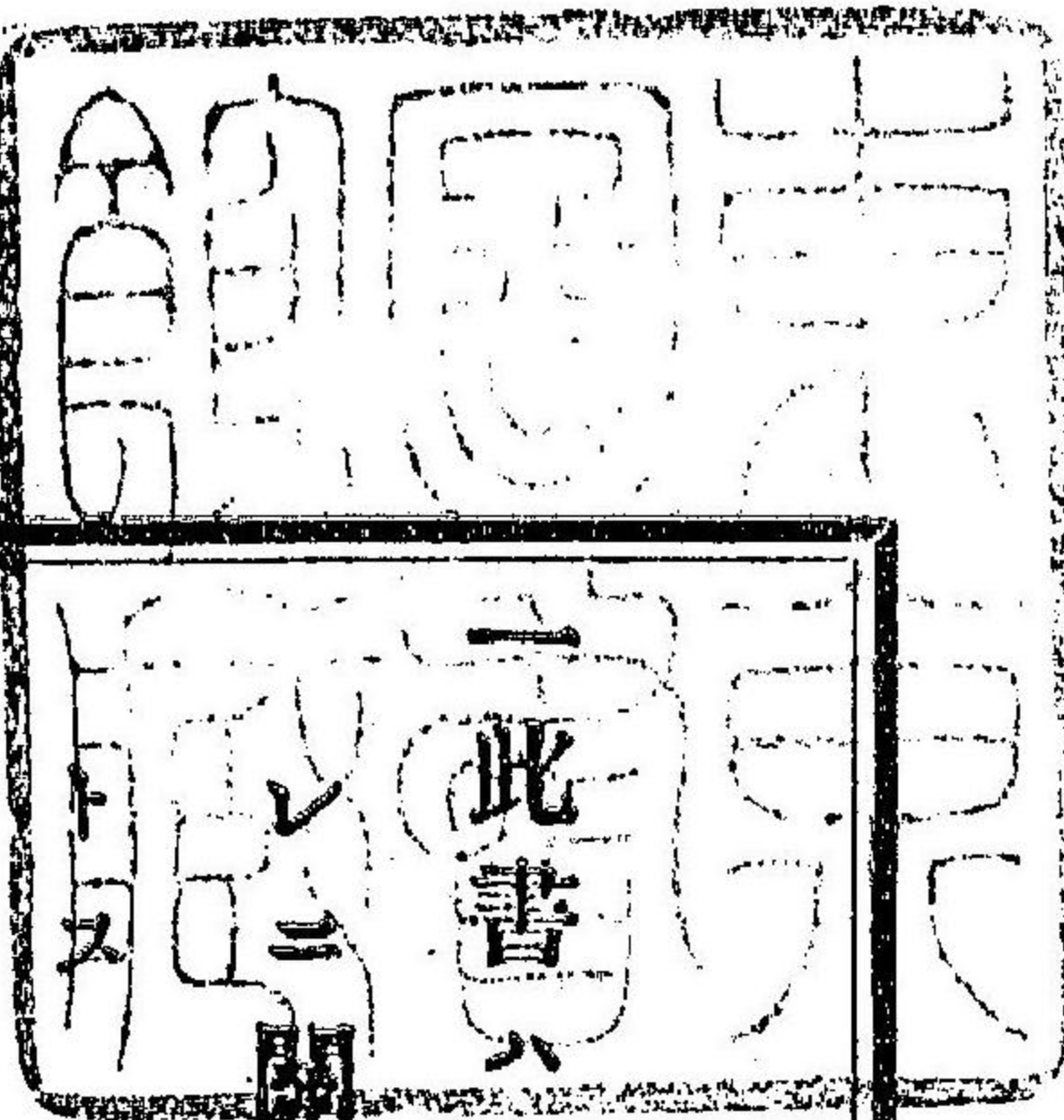
之指

針

明治十七年二月
陸王書



凡例



- 一此書ハ民法上訴訟手續詞訟權限身代限處分方及ヒ之
ニ關涉スルモノ等偏ク現行ノ法令ヲ蒐集スルモノ
- 一布告達ニシテ其中一二ノ條款ノ改正或ハ追加或ハ他
ノ布告達ニ因テ自然消滅等ニ係ルモノハ割註ヲシテ
必ス其沿革ノ要ヲ明示ス
- 一各則中甲則ノ參照スヘキ乙則丁則等アルモノハ皆ナ
其號次要目ヲ詳カニシ以テ索引ニ便ナラシム

明治十七年二月

編者誌

現行民事訴訟必讀

目次

- 第一章 訴訟手續
- 第一款 訴答文例
- 第二款 出訴期限
- 第三款 融通使用ヲ爲サ、ル預メ金數ノ出訴期限
- 第四款 訴訟勸解中出訴期限滿期ニ至ル者ノ處分方
- 第五款 裁判執行ノ出訴期限
- 第六款 控訴上告
- 第七款 控訴狀數通差出方
- 第八款 訴訟勸解
- 第九款 訴訟印紙用方

第十款 訴訟入費償却方

第十一款 訴訟代人

第十二款 裁判上勅奏官及華族並判任以下呼出方

第二章 詞訟權限

第十三款 離縁ノ訴訟

第十四款 負債者失踪後ノ訴訟

第十五款 行政上處分不服者出訴方

第十六款 民事審理中告訴

第十七款 民刑附帶ノ裁判

第十八款 無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人

第十九款 民刑事上告ニ係ル裁判ノ再審

第二十款 金穀連借處分方

第二十一款 償却無期限金穀貸借處分方

第二十二款 融通使用ヲ爲サ、ル等ノ明文ナキ預金穀處分方

第二十三款 金穀等借用證書ヲ他ニ讓渡ス者書換方

第二十四款 證據立

第二十五款 訴訟ノ取捨

第三章 身代限

第二十六款 華士族平民僧侶身代限處分方

第二十七款 同居ノ子弟或ハ別居等財産ヲ異ニスル者身代限處分方

第二十八款 身代限ヲ爲ス者ニ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定

約未期限内出訴處分方

第二十九款 身代限ヲ爲ス者ヨリ他ニ金穀貸附ノ證書アル者處分

方

第三十款 請人證人辨償方

第三十一款 貸下金諸上納金等未納者身代限ノ際處分方

第三十二款 身代限ノ際區入費取立方

第三十三款 身代限ノ際財產隱匿スル者處分方

第三十四款 諸坑業稼人身代限處分中停業

第四章 雜則

第三十五款 民事上証據物取扱方

第三十六款 利息制限法

第三十七款 契約證書解釋方

第三十八款 裁判上入札糶賣等取計方

第三十九款 治安及始審裁判所權限

第四十款 呼出期日遲不參處分方

現行民事訴訟必讀目次終

現行民事訴訟必讀

中井要平 編輯

○第一章 訴訟手續

○第一款 訴答文例

第二百四拾七號布告 六年七月十七日

今般訴答文例并附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原被告
人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

別冊

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以

ヲ被告人ノ現住管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書附ヲ取
ル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ
及ハス

住所トハ某府縣管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄留ト記スノ類身分
トハ官名役名華士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類
若シ一戸ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄
介ト記スヘシ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄
ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ交通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付
ヲ取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場交通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可
シ

但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀

中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

(代書人ヲ用フルノ件七年七月第七十五號布告ヲ以テ
改正セラレ文例中右ニ牴觸スル條等總テ廢止トス改
正布告本文ハ本款ノ末ニ出ス參看)

第三條 原告人訴狀ヲ作ルハ必ス代書人ヲ撰ミ代書セシメ自ラ書ス
ルヲ得ス但シ從前ノ差添人ヲ廢シ之ニ代ルニ代書人ヲ以テス

第四條 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付被告人ト往復スルノ文書
モ亦代書人ヲシテ書セシメ且代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ若シ
代書人ヲ經サル者ハ訴訟ノ証ト爲スヲ得ス

第五條 代書人疾病事故アリテ之ヲ改撰スル時ハ即日頼主ヨリ裁判
所ニ届ケ且ツ相手方ニ報告ス可シ其裁判所ニ届ケス被告人ニ報告

セサル以前ハ假令代書スルモ代書人ト見做スヲ得ス

但外國人ハ此章ノ限ニアラス

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルコトハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長
ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルコト
得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニ
シ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ 附録
号ヲ見合
ス可シ

但外國人ノ爲ニハ第一章但シ書ヲ見ル可シ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコ

能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可
シ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ
裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル
時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八里以内ナ
ル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡
シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キ

ヲ返濟セサル事情ヲ書ス可シ 附錄第二号ヲ
見合ヌ可シ
田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ捐料金又ハ諸種ノ立替金
又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ
受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ
但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明
ニ記載スヘシ 六年十月第三百三十九号布告ヲ以テ訴答文例ハ詮
議ノ次第モ有之當分御國人ノミ遵守スヘキノ旨
但附錄第十八号ヲ見合ヌ可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月
日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル
事情ヲ書ヌ可シ
借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若シハ親族等

ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總
計ノ高ヲ出シ之ニ被告入ノ証印アルコトヲ記入シ次ニ違約淹滞シタ
ル事情ヲ書ヌ可シ 附錄第三號ヲ (本文中被告入ノ証印アルコトヲ記
入スヘキ廉ハ十年第四十四號布
告ニ依テ消滅ス)
賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告入ノ証印ナキ
時ハ原告入ノ証據ト爲スコトヲ得ス (本項ハ十年第四十四號布告及ヒ
以テ訴答文例中第十四條第廿八條第廿九條ヲ除ク外云々スル所
ノ証書ナシト雖モ証據ノ端緒之レアルニ於テハ憑據アル訴答ト見
認可キハ勿論ノ旨等ニ依テ消滅ス)

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ

至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買
附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物
品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載
シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ 附錄第四號ヲ
見合ヌ可シ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時
ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金
ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ
年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス
可シ 附錄第五號ヲ
見合ヌ可シ

第拾一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負
ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未ダ受取ラサル金數トヲ標記シ次

ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第拾二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサ
ル者ヲ取返サノスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日
ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載
シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ
其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可
シ

奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞
ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第拾三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ撰做密賣スル者ヲ差留メントスル
ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル
役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ
寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ
諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ
他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルヲ得ス

第拾四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ
類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルヲ得可
シ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ
先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之
ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相牴觸スル

ヲナカル可シ 第十三條ヲ
見合ヌ可シ

第拾五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月
日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離
姻ヲ爲ス可キ原由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母祖父母在ラサレ
ハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族
ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ
爲ヌ可シ 附錄第六号ヲ
見合ヌ可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可シ若シ事危
急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ラ訴フ事ヲ得可シ

第拾六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生
 年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被双方ノ戸籍人別
 ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ原由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又
 ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲ス可シ
 本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ若
 シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルヲ得ヘシ
 養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請ノ訴ヲ爲スヲ得ス
 第拾七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父
 母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被双方ノ戸籍人別
 ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條
 理ト被告人相續ス可キ條理ヲキヲ書ス可シ
 附錄第六号ヲ
 見合ヌ可シ

第拾八條 田畑山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸
 家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ
 田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ントスルノ訴
 狀モ第十條第二項ニ照ス可シ

第拾九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪
 圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ
 舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱書ス可シ
 繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃
 色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ヒ可
 シ
 附錄第七號ヲ
 見合ヌ可シ

但第七條但シ書ヲ見ル可シ

第二拾條 控告ノ訴狀

原被告人預審又ハ終審ノ裁判官渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判官渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨赴トテ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルノ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スヲ得ス(本項末段控告期限ノ廢ハ八年第九十三號布告控訴上告手續ニ依テ消滅ス)預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アル

ヲ以テ原被告人之ヲ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ(本項ハ八年第九十一號布告上等裁判所章程第一條ニ依テ消滅ス但裁判官曲庇壓制等アルモハ大審院章程第五條ニ依リ刑事告訴ヲ爲スヲ得)

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第貳拾一條 原被告人共人員多少ニ拘ラズ訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ全時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合ヌヲ得ル事

第貳拾二條 貸借二事以上ニシテ原被告人共別人ニ非レハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合ヌヲ得可シ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第貳拾三條 債主連名ノ証文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ

以テ訴ヲ可シ若シ債主連名三人ナルチ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ
二人ヨリ依頼ノ証書ヲ以テ訴フ可シ 附錄第八號ヲ
見合ヌ可シ

第貳拾四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄
ニ訴ルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第貳拾五條 負債主連名ノ借用証文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀
ハ連名ノ人数ヲ盡ク相手取ル可シ

第貳拾六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ

連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長
某ヨリ承ルト附載スヘシ 附錄第九號ヲ
見合ヌ可シ

第貳拾七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於
テ審判スルヲ願モ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任

ス可シ

第九章 讓証文ヲ以テ訴ル事

第貳拾八條 甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ丙ニ讓リタ

ルニ乙ヨリ丙ニ返濟セスシテ丙ヨリ乙ヲ相手取り其米金ヲ受取ソ

トスル訴狀モ住所氏名ノ次ニ甲ヨリ丙ニ讓リタル証文ヲ寫載シ若

シ甲ヨリ丙ニ讓リタル証文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ

關係ナシトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルヲ得ス 附錄第十號ヲ
見合ヌ可シ

(本條ハ九年第九十九號布告ヲ以テ金穀等借用証書ヲ其貸主ヨリ他
人ニ讓渡スルハ其借主ニ証書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシ
メサルニ於テハ貸主ノ讓渡証之レアルトモ仍ホ讓渡ノ効ナキ旨云
々ニ依リ消滅ス但シ証書讓渡書換方同處分方等ハ第二章第二十三
款ニ詳出ス)

第貳拾九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタ

ル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附証文ヲ所持スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル証書ナキ時ハ之ヲ訴ルコト得ス

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得可シ(本條ハ但書ヲ除キ前條ト同シ)シテ九年第九十九號布告ニ依テ消滅ス

第十章 代理人ノ事

(本章中代理人ノ件ハ九年第十八號布告ヲ以テ訴答文例中代理人ノ條來ル三月三十一日限り廢シノ旨)

第三拾條 原告人ノ情願ニ因テ代理人ヲシテ代言セシムルコトヲ許ス
代理人ヲ用フル者ハ其訴狀ノ與書ニ代理人ニ依頼シタル旨ヲ記載シテ原告人及ヒ代理人ノ連印ヲ爲スヘシ若シ連印ナクシテハ代言セシムルコトヲ許サス 附錄第十一號ヲ見合ヌ可シ

第三拾一條 原告人代理人ヲシテ代言セシムル時訟庭ニ同席スル事

ハ其情願ニ任カス

第三拾二條 訴訟ニ關係スル書類ハ代理人又ハ保證人ノ類ニ雖モ原告人ノ証ト爲ル可キ者ハ原告人ノ撰ヒタル代書人ヲシテ代書セシメ其代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ原告人ノ自書ヲ用フルコト得ス(本條中代書人ノ件ハ七年七月第十五號布告ヲ以テ改正セラル但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ詳出ス參看)
書面ノ末ニ署名スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ若シ本人自署スルコト能ハサレハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

但第二章但書ヲ見ル可シ

訴訟中原告人又ハ代理人ノ疾病事故ニ因テ假リノ代理人ヲ出ス時ハ原告人又ハ代理人ヨリ假リノ代理人ニ依頼スルノ証書ヲ出ス可シ若シ証書ナクシテハ假リノ代理人ト爲スコトヲ許サス 附錄第十二號ヲ見合ヌ可シ

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三拾三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理ヲ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ 第四十七條及四十八條ヲ見合ス可シ 書人ノ件ハ七年七月第七十五號布告ヲ以テ改正セラル但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ詳出ス參看)

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確証ヲラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ

末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可シ 附錄第十三號

ヲ見合 (本文中代書人ノ件ハ七年七月第七十五號布告ヲ以テ改正セラル但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ詳出ス參看)

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ本人自書スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

(本章ハ七年七月第七十五號布告ヲ以テ改正セラル但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ詳出ス參看)

第三拾四條 被告人自ラ答書ヲ書スルヲ許サス必ス代書人ヲシテ代書セシム可シ其代書人ヲ撰ミタル時ハ即日裁判所ニ届ケ且原告人

ニ報告スヘシ其他代書人ヲ用フル方法ハ第三條第四條第五條第六條ニ照ス可シ

第三章 代言人ノ事

(本章代言人ノ件ハ九年第十八號布告ヲ以テ訴答文例中代言人ノ條來ル三月三十一日限り廢シノ旨)

第三拾五條 被告人ノ代言人ヲ用ルモ亦其情願ニ任ス然レモ必ス本人自ラ同伴シテ訟庭ニ出席シ其結局ハ本人ヨリ決答ヲ爲ス可シ

第三拾六條 被告人代言人ヲ出ス時ハ答書ノ奥書及ヒ連印等ノ方法

第三十條ニ照ス可シ

第三拾七條 答書ニ關係スルノ書類ハ代言人又ハ保證人ノ類ト雖モ被告人ノ証ト爲ルヘキ者ハ被告人ノ撰ミタル代書人ヲシテ代書セシメ且ツ代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ被告人ノ自書ヲ用フルヲ

得ス(本條代書人ノ件ハ七年七月第七十五號布告ヲ以テ改正セラル但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ詳出ス參着)

書面ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラス若シ本人自署スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第四章 原告人ノ返リ証文ヲ所有シタル答書ノ事

第三拾八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ証書ヲ還附セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ証文返証文ハ原ノ証書ヲ還附セスシテ其米金返証文ハ債主ヨリ受取ノ証書ヲ交付スルヲ云フヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三拾九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ証書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確書ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ証跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ証書ヲ以テ返リ証文ト看做スヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四拾條 借用ノ米金等ヲ返濟ス可キ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟識シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本証文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談一札トハ返濟アルコトヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書ス可シ

第四拾一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本証文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ証トナスコトヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四拾二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ証スル爲ニ管轄(町村)ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ

次ニ此人別帳ノ印ノ證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四拾三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ラレタル事件ニ未ダ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四拾四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦過キ未ダ訴ヘスト雖ヒ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ

第四拾五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ

期限ヲ過キテ訴ヘテソタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返済セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未ダ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返済ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返済セシメテ答ルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四拾六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルヲ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十四號ヲ見合ヌ可シ

第四拾七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既済又ハ未済ト雖ル更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ

各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返済延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四拾八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返済スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完シ返済スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨赴テ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十五號ヲ見合ヌ可シ

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四拾九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償セシメテ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨赴テ書シ代償人及原告人ノ與書連印ヲ爲サ

シム可シ 附録第十六號
ヲ見合ヌ可シ

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル

答書ノ事

第五拾條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償セシムヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カヌ延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨赴キ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書延印ヲ爲サシム可シ 附録第十七號

訴答文例附録

第一號

訴狀表紙ノ式 美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユ可シ

住所
身分
氏
名

年月日

某訴狀

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴ルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類
訴狀ノ式

住所
身分

某訴

原告人 氏 名

住所

身分

被告人 氏 名

標記云々

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日 氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

(本文中代書人ノ件ハ七年七月第
七十五號布告ヲ以テ改正セラル
但シ改正布告本文ハ本款ノ末ニ

詳出ス參看以下每號皆ナ同シ

某

御裁判所

(宛所書式ハ六年九月第三百十二號布告ヲ以テ某裁判
所長氏名宛ニ改正セラル以下每號皆ナ同シ)

第二號

貸金催促ノ訴狀

住所

身分

原告人 氏 名

貸金催促ノ訴

住所

被告人
身分
氏

名

一元金何圓 年月日貸附

一利金何圓 一年又ハ一

合何圓

右証文ノ寫左ノ如シ

借用証文

一金何圓

右云々

借主

証人

氏

名

名

貸主
名宛

右原告人氏名申上候云々

住所

身分

氏

名

印

住所

身分

氏

名

印

代書人

某裁判所長

氏

名

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴

原告人 住所 身分 氏 名

被告人 住所 身分 氏 名

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御坐候
但帳面ニ被告人ノ証印有之候

若賣掛帳ニ非スシテ証文ナレハ其証文全文ノ寫
ヲ出ス可シ

右原告人氏名申上候云々

年月日 氏 名 印
住所 氏 名 印
代書人 氏 名 印
某裁判所長 氏 名

第四號
買附米引渡違約ノ訴狀

買附米引渡違約ノ訴
原告人 住所 身分 氏 名
原告人 氏 名

住所
身分
氏
名

一米何石 年月日買取約定濟
此度受取可キ石高

代金何圓 一石ニ付
何圓換

内何圓 年月日手附金トシテ渡濟

幾何圓 年月日限現米引替ニ渡ス可キ約定

右約定証書ノ寫左ノ如シ

証書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所
氏
名
印

代書人
身分
氏
名
印

某裁判所長

氏
名

第五號

賣附生絲代金引渡違約ノ訴狀

住所
身分
氏
名

原告人

賣附生絲代金引渡違約ノ訴

住所

身分

被告人

氏

名

一金何圓 年月日限生絲引替ニテ
 受取ル可キ殘金高
 元金何圓 年月日生絲何斤賣附
 約定ノ金高
 但何斤ニ付何圓替
 年月日手附金トシテ
 內何圓 受取濟
 右約定證ノ寫左ノ如シ
 證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所 氏 名 印
 住所 氏 名 印
 代書人 氏 名 印
 某裁判所長 氏 名

第六號

妻離別ノ訴狀

妻離別ノ訴

原告人 住所 身分 氏 名
 被告入 住所 身分 氏 名
 夫 氏名 當何歲
 妻 氏名 當何歲 年月日娶ル
 某御役所ニ差出置候年月日ノ戶籍人別帳ノ寫左ノ如シ

人別帳云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名

印

住所

身分

代書人

氏

名

印

前書申上候處相違無御坐候

住所

身分

年月日

原告人ノ祖
父母父母等

氏

名

印

某裁判所長

氏

名

人別帳云々	右原告人氏名申上候云々	年月日	代書人	前書申上候處相違無御坐候	年月日	某裁判所長
氏	氏	氏	氏	住所	住所	氏
名	名	名	名	身分	身分	名
印	印	印	印	原告人ノ祖 父母父母等	原告人ノ祖 父母父母等	印

第七號

經界ナ争フ繪圖ノ式

年月日ノ原圖 何枚ノ一

年月日寫之

住所

身分

原告人

氏

名

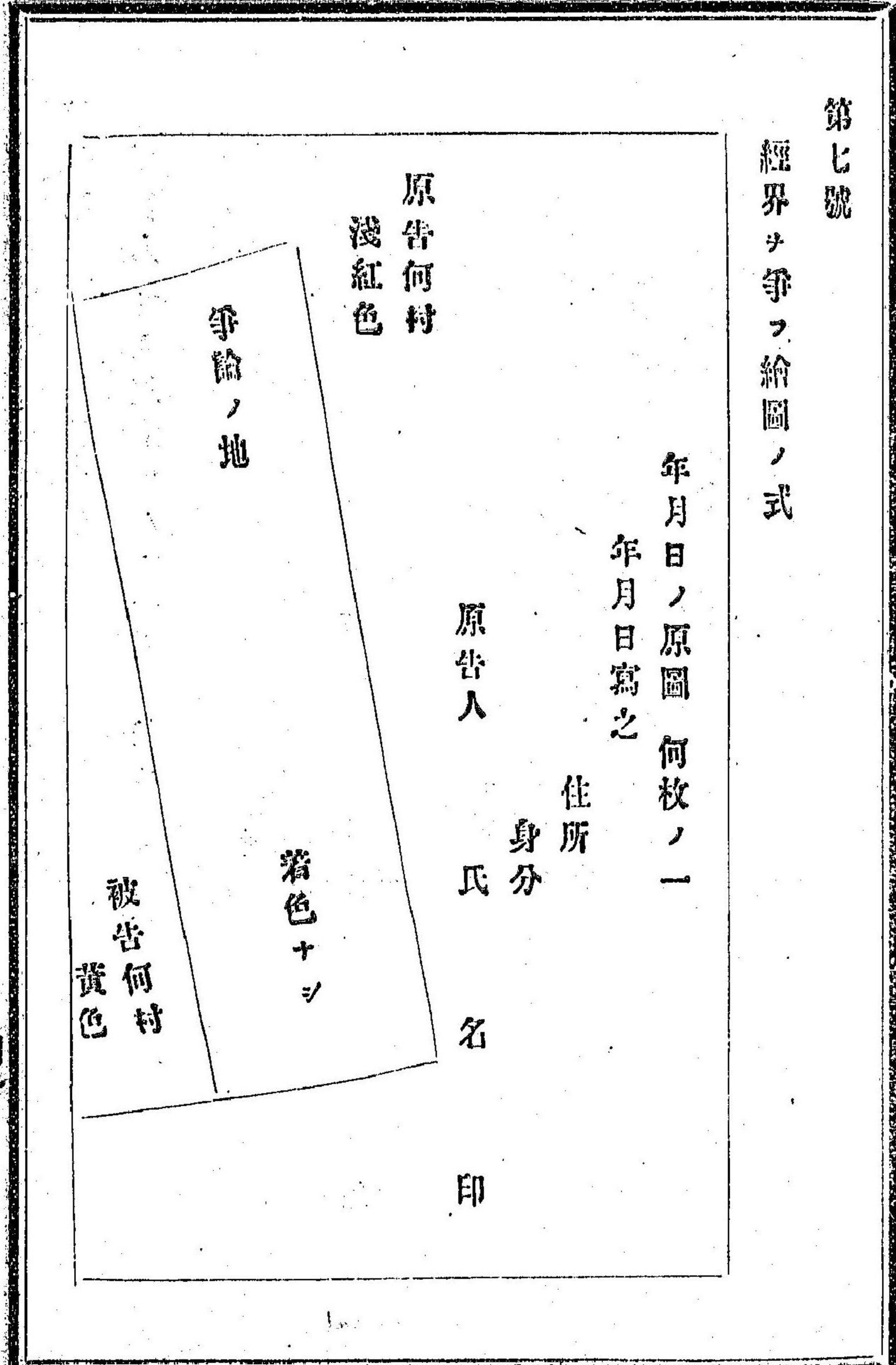
印

原告何村
淺紅色

着色ナシ

争論ノ地

被告何村
黃色



第八號

原告人三人以上ナル者一人ニ任スル訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

某ノ訴

住所

身分

被告人

氏

名

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所

氏

名

印

身分

代書人

氏

名

印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申上等ニ御座候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何ノ誰ニ總代相頼候然ル上ハ何ノ誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異儀申上間敷候爲後証奥印仕候

住所

身分

氏

名

印

住所

身分

氏

名

印

住所

身分

氏

名

印

代書人

年月日

某裁判所長
氏

名

第九號

被告人連名中脱走又ハ病死人ナルノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

住所

身分

被告人

氏

名

元住所

身分

某ノ訴

被告人

氏

名

右何ノ誰ハ年月日脱走致シ候段
何(町村)役人何ノ誰ヨリ承知仕候

住所

身分

被告人

氏

名

右何ノ誰ハ年月日死亡致シ候段
何(町村)役人何ノ誰ヨリ承知仕候

住所

身分

氏

名

印

年月日

右原告人氏名申上候云々

代書人

氏

名

印

某裁判所長

氏

名

第拾號

讓証文ヲ以テ催促スル訴狀

(本號式ハ九年第九十九號布告ヲ以テ金穀等借用証書ヲ他へ讓渡ス際証書々換ヘシムヘシ云々ノ旨ニ依リ消滅ス但シ証書讓渡書換方同處分方等ハ第二章第二十三款ニ詳出ス)

住所

身分

原告人

氏

名

住所

身分

被告人

氏

名

某ノ訴

一利金何圓

一利金何圓

合何圓

右証文ノ寫左ノ如シ

證書云々

右讓証文ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所

身分

代書人

氏

名

印

某裁判所長

氏

名

第拾一號

代 言 人 ヲ 頼 ム 訴 狀

(本號代 言 人 ノ 件 ハ 九 年 第 十 八 號 布 告 ヲ 以 テ 訴 答 文 例 申 代 言 人
ノ 條 來 ル 三 月 三 十 一 日 限 リ 廢 シ ノ 旨)

住 所

身 分

原 告 代 言 人 氏 名

印

住 所

身 分

被 告 人 氏 名

印

某ノ訴

標記云々

右原告代 言 人 氏 名 申 上 候 云 々

年 月 日

住 所

身 分

代 書 人 氏 名

印

前書ノ儀私ヨリ御願可申上答ニ御座候處何々ノ旨赴ニ付
何ノ誰ニ代 言 相 頼 候 然 ル 上 ハ 何ノ誰ヨリ申上候事柄并ニ
御受申上候事柄共後日ニ至リ私ヨリ異議申上間敷候爲後
證與印仕候

住 所

身 分

原 告 人 氏 名

印

某裁判所長

氏 名

第拾二號

一時假リノ代言人ヲ出ス證書

(本號代言人ノ件ハ九年第十八號布告ヲ以テ訴答文例中代言人ノ條來ル三月三十一日限り廢シノ旨)

住所 身分 名 印
當日代言人 氏

右ハ何々ノ儀私ヨリ訴出候ニ付罷出委曲申上度奉存候處
病氣ニ付今日限何ノ誰ニ代言相頼候若御尋ノ儀同人ニテ
御對申上兼候廉有之候ハ、私快氣次第罷出可申上候

住所 身分 名 印
住所 氏

年月日

身分 名 印
代書人 氏
某裁判所長 氏

第拾三號

答書表紙ノ式用紙寸法第壹號
訴狀ノ法ノ如シ

年月日

某ノ答書

住所 身分 名
氏

答書ノ式

住所

身分

被告人

氏

名

某ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御
狀拜見仕御答申上候

私儀云々

證據ノ書類ノラハ其寫ヲ記載スヘシ

右ノ通御座候

年月日

住所

身分

氏

名

印

某裁判所長

氏

代書人

氏

名

印

名

第拾四號

對決前熟議解訟ノ答書

住所

身分

被告人

氏

名

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御
狀拜見仕原告人ニ熟談濟方仕候赴申上候
私儀云々

年月日

住所 氏 名 印

代書人 氏 名 印

前書被告人何ノ誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候ニ付此上對
決ノ御裁斷不奉願候

年月日

原告人 住所 氏 名 印

住所 氏 名 印

代書人 氏 名 印

其裁判所長 氏 名

名

第拾五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

住所

身分

被告人 氏 名

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御
狀拜見仕原告人ニ熟談ノ上濟方日延約定仕候段左ノ通御
座候

私儀云々

年月日

住所 氏 名 印
身分

前書被告人何ノ誰申上候通熟談ノ上濟方日延約定仕候ニ
付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

代書人 氏 名 印

住所

身分 氏 名 印

住所

身分 氏 名 印

代書人 氏 名 印

某裁判所長

氏 名

第拾六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所

身分

被告人 氏 名

某ノ訴何ノ誰ヨリ日延代償ニテ濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御
狀拜見仕原告人ニ熟談ノ上親族朋友中何ノ誰ヨリ日延代
償約定仕候段左ノ通御座候

私儀云々

年月日

氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

前書被告人何ノ誰申上候通私共ヨリ日延代償ノ約定仕候

段相違無御座候

年月日

代償人

住所
身分
氏

名

印

代書人

住所
身分
氏

名

印

前書被告人何ノ誰申上候通私共承諾仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不奉願候

年月日

原告人

住所
身分
氏

名

印

代書人

住所
身分
氏

名

印

某裁判所長
氏

名

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

被告人

住所
身分
氏

名

某ノ訴何ノ誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人ニ熟談ノ上親族朋友中何ノ誰ヨリ代償濟口日延ノ約定仕候段左ノ通御座候
私儀云々

年月日

氏

名

印

住所

身分

代書人

氏

名

印

前書被告人何ノ誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段相違無御座候

住所

身分

代償人

氏

名

印

住所

身分

代書人

氏

名

印

前書被告人何ノ誰申上候通熟談ノ上何ノ誰ヨリ代償濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日迄御裁判御猶豫奉願候住所

訴狀

第十八號

外國原告人訴狀ノ式

年月日

原告人

身分

氏

名

印

住所

身分

代書人

氏

名

印

某裁判所長

氏

名

本國住所

身分

原告人

氏

名

印

住所
身分
被告人 氏 名

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所へ左ノ
通訴訟申上候

第一云々
第二云々
第三云々
但シ訴訟ノ根源事實ノ大略ヲ明白ニ
認ムヘシ若其事實混交ノ長文ナル時
ハ第一第二第三條ト之ヲ區別スヘシ
依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候
ヤ金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト
認メ其他公正ノ御裁判ヲ願ノ赴テ認
ムヘシ

日本地名
年月日
原告人 氏 名 花 押

若シ原告人ノ代官者アル時ハ左ノ如
ク加判スヘシ
代官者 氏 名 花 押
某
裁判所長 名

第七十五号布告 七年七月
十四日

明治六年(七月)第二百四十七号布告訴訟答文例中原告人被告人訴狀答書
ヲ作ルコ必ス代書人ヲ用フヘキ旨記載候處自今左ノ通改定候條此旨
布告候事

一原告人被告人訴狀答書及ヒ双方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰ニ代
書セシムル共又ハ代書人ヲ用ヒスシテ自書スル共總テ本人ノ情願

ニ任スヘキ事

一原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ戚親又ハ朋友ノ者ヲ以テ
差添人トナシ訴狀答書等へ連印セシムヘキ事（本項差添人ノ件ハ八
年二月第十三号布告
ヲ以テ自今原告人等訴訟手續ニ
差支サルモノハ差添人ニ不及旨）

但訴答文例中本文ト相抵觸スル廉々ハ總テ廢止ノ儀ト可相心得
事

○第二款 出訴期限

第三百六十二号布告 六年十一月五日

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ双方
ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約
ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘弁ヲ加ヘ
出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタ

シ候トモ又ハ勘弁ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不
相定候處右延期勘弁中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方
請人証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ
裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條
來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過
去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者
ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事
ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

一學藝ノ授業料

一旅籠料

- 一 運送費
 - 一 飲食料
 - 一 手附金
 - 一 商人互ノ賣掛金
 - 一 職人ノ手間代金
 - 一 日雇人ノ給料
 - 一 諸負金
 - 一 芝居等ノ木戸錢又ハ樽敷錢等
 - 一 男女藝者ノ湯代金
- 右ハ六ヶ月限
- 第二條
- 一 醫師ノ診診及ヒ藥料

- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與メタル飲食料
 - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
 - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利足
- 一 期限ヲ定タル預米金及ヒ利足アレハ其利足
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
- 一 小作米金
- 一 証據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料

- 一 養育料
- 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金
- 右ハ五年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切タル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切ナル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類

ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百号布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス(五年第三百号布告ノ第三條ハ貴賤上下一般ノ人民互ニ金銀貸借シ期月後滿五年ニ至ルマテ一度モ訴出サル者ハ裁判不旨)

○第三款 融通使用ヲ爲サ、シ預ケ金數ノ出訴期限

第拾二号布告 十年一月二十九日

預ケ金數ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラヌ受理スヘキ成規ニ候處自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

○第四款 訴訟勸解中出訴期限滿期ニ至ル者ノ處分方

司法省第四拾四号達 九年四月十七日

區裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限滿期ノ者處

置方左ノ通可相心得此旨相違候事

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸解不
調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フ可シ

第二條 解勸調ハサル時右滿三十日迄ニ府縣裁判所ニ出訴ヲ爲サ、
ルニ於テハ其事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看做ス可シ

○第五款 裁判執行ノ出訴期限

司法省丁第九号達 十一年三月
十一日

裁判執行ノ出訴期限ニ付高知裁判所ヨリ甲号ノ通伺出ニ因リ乙号ノ
通太政官へ伺候處伺ノ通ト御裁令有之ニ付丙号ノ通及指令候條爲心
得相違候事

甲号

高知裁判所長判事石井忠恭伺 十一年一月
十二日

明治八年四月二十五日滋賀縣伺ノ御指令ヲ所味スルニ主タル訴件ニ
附帶シ訴訟入費曲者ヨリ直者ニ償却可致旨裁判言渡ノ後直者ヨリ滿
六ヶ月ヲ經過シテ其償却ヲ請求スルルハ出訴期限第一條ニ據リ直者
ニ於テハ要償權利ヲ失シ曲者ニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得ルニ至ル然
ルニ主タル訴件ニ限リ權利者ニ於テ在舊數年ノ久ヲ經過スルモ裁判
執行ヲ請求スルヲ得ルハ允當ナラサル様被相考等シク是レ直者ノ曲
者ニ於ケル如ク木案ニ關スル 賣掛代金 等ノ訴件モ初審又ハ終審裁判
言渡當日ヨリ起算シ夫々該訴ノ種類ニ應シ出訴期限ノ的條ヲ經過シ
テ權利者ヨリ裁判執行ヲ請求スルルハ權利者ニ於テハ裁判權利ヲ拋
棄シ義務者ニ於テハ其義務ヲ免レタルモノト見做シ裁判執行ノ請求
狀及却下可然哉至急御指令ヲ仰キ候也

乙号

太政官へ上申 十一年二月 八日

別紙高知裁判所伺ノ趣ヲ審思スルニ裁判言渡ノ後更ニ執行ヲ請求セ
ス程其歲月ヲ經過スル者ハ固ヨリ期滿得免ノ効ヲ得ヘシ何トナレハ
裁判言渡ニ因リ裁判ヲ執行スルノ權義ヲ生セシムルヲ以テ其權義ニ
付必ス期滿得免ノ効アラサルヘカヲサレハナリ抑斯ノ期滿得免ハ訴
訟原案ノ種類ニヨリ期滿得免ノ長短ニ拘ハラサルヘシ蓋シ裁判言渡
ナメ者ハ雙方ノ間ニ更ニ裁判上ノ契約ヲ生セシムルノ理アルヲ以テ
ナリ我國現行ノ出訴期限 六年第三百六
十二年号布告
ヲ視ルニ裁判執行ノ出訴期限ニ於テハ明文アルヲナシ而シ其最モ長
キ者五年ナリトス因テハ該伺ノ如キ訴訟原案ノ種類ニ拘ハラヌ滿五
年ヲ以テ期限トナスコト允當ト思考スルニ因リ左ノ通指令可及ト存候
得共明文ナキヲ以テ此段申稟候也

丙号

指令 伺ノ趣裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ
五ヶ年ナル可シ(出訴期限規則ハ六年十一月第三百六十二号布告
ヲ云フ即チ第二款ニ出ス參看)

○第六款 控訴上告
第十九号布告 十年二月 九日

明治八年五月第九十一号布告大審院諸裁判所職制章程同年(同月)第九
十三号布告控訴上告手續別冊ノ通り改正候條此旨布告候事
但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事(大審院諸裁判所職制章程
控訴上告手續

第一章 控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セヌヲ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ
覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ(十五年司法省第十号達ヲ以テ地
方裁判所ヲ始審裁判所上等裁判所

ヲ控訴裁判
所ト改稱

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス(控訴ノ刑事ニ及ハサル旨
消滅スト雖モ十四年十二月第七十四号布告ヲ以テ治罪法中刑事
ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セサル旨)

第三條 控訴ハ一ダビスルヲ得再ビスルヲ得ス

第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方
又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡シヨリ第七日マテニ
裁判言渡ノ翌 裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得
日ヨリ數ヲ 得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヲ要スルノ場
合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヲ得

第五條 地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ三ヶ月(三十日)ヲ以テ一月トス(ヲ
過ルルハ控訴スルヲ許サス但地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ル
ノ距離八里ヨリ遠キハ期限三ヶ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増

スヘシ(控訴期限三ヶ月ノ處十五年四月第二十一号布告ヲ以テ控訴
上告手續第五條中三ヶ月トアルハ總テ二ヶ月ト改正ノ旨)

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ届ケ出ツヘ
シ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止
スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アル時ハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答
書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ
第二章 上告總則ノ事(本章中刑事ノ上告ニ係ルモノハ治罪法ニ
因テ消滅)

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル
者之ヲ上告ト云

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ
第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ス

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニア
ラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ
理セズ

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコ
トヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者己ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フル
コトヲ得ズ

第三章 民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ己ニ上等裁判所ニ控訴シ其
審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ

大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルコトヲ要ス若シ原裁判
所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一
日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルコトヲ許サズ
上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 代理人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ

裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ

裁判言渡キ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 上等裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編

シテ一冊ト爲シ又ハ葉數多ク付編シテ幾冊ト爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所

ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ

取ルヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫

ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第拾六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ

其金高ク預ケサルハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルハ其預リ金ヲ沒入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁

判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被

告人ノ費用ヲ償ハシム 被告トハ上告(訴訟入費償却方ハ第一

第拾七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於

テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第拾八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破

毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シ 大審院ヨリ執行ヲ止メ更ニ

審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘ

シ(上告ニ付テハ原裁判ノ執行ヲ停メサル)

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第拾九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧ケルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二拾條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第廿一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第廿二條 被告人ハ呼出シ狀ヲ受取タルヨリ三十日內ニ答弁書ヲ作リ自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但シ被告人ノ住所ヨ

リ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ
第廿三條 大審院ニ於テ被告人ノ答弁書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取經メ遲緩ナシ一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被告對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被告對審ノ呼出狀ヲ原被告雙方ニ送達スヘシ

第廿四條 原被告對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被告交互ノ論弁ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ其裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第廿五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章 刑事上告ノ事(本章刑事ノ上告ハ治罪法制定ニヨリ消滅ヲ主トスルニヨリ以下之ヲ省略ス)

○第七款 控訴狀數通差出方

司法省丁第八十四號達 十年十二月三日

大審院 諸裁判所

控訴者訴狀數通差出方ノ儀長崎上等裁判所ヨリ甲號ノ通伺出候ニ付乙號ヲ以テ太政官へ上申シ御裁令ノ上丙號ノ通及指令候條此段爲心得相達候事

甲號 十年九月一日

長崎上等裁判所長判事伊丹重賢伺

控訴者訴狀正副而通シ差出ス成規ニ有之動モスレハ被告數名ニシテ該時居住各所ニ相成遠シ數十里ヲ相隔候者間々有之右副書一冊ヲ以

テ數人へ答弁等申付候テハ不都合不少是カ爲メ自然事務遷延人民ノ雜沓甚ナカラズ以來右様相手方數員ニシテ其内旅行又ハ隔地へ散在スル者アル時ハ上等裁判所ニ於テハ直ニ原告人へ申談時宜ニ應シ數通差出サセ候テ可然哉此段上申仰御指揮候也

乙號

太政官へ上申 十年十月二十九日

長崎上等裁判所伺控訴人訴狀ノ儀正副二通トハ訴狀ノ進呈ノ常式ニシテ該伺ニ謂ヘル如ク相手方數名或ハ旅行或ハ遠地隔絶ノ場合ニ於テ原告人へ申談シ適宜ニ數通差出サシムルハ差支無之儀ト思考候へトモ訴答文例第六條第四項ニ明文アルヲ以テ一應相伺候間急速何分ノ御裁令被下度候也

丙號

伺之通 十年十一月三日

○第八款 訴訟勸解

司法省甲第十七號諭達 九年十一月二十七日

民事ノ詞訟ハ可成丈ケ一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可ク此旨諭達候事

○第九款 訴訟印紙用方

第五号布告 明治十七年二月廿三日

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年(十二月)第百九拾六號布告訴訟用印紙規則ハ右施行ノ

目ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノ

ト大

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用ス可シ

金額	價額	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五圓マテ	拾圓マテ	貳拾圓マテ	五拾圓マテ	七拾五圓マテ	百圓マテ	貳百五拾圓マテ	五百圓マテ	七百五拾圓マテ	貳拾錢	三拾錢
									六拾錢	壹圓五拾錢
									貳圓貳拾錢	三圓
									六圓五拾錢	拾圓
									拾圓	三圓

同 千圓マテ

拾五圓

同 貳千五百圓マテ

貳拾圓

同 五千圓マテ

貳拾五圓

同 五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ

控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス

可シ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戸長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判

官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアル可シ

第四條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

答辨書證據物寫辨駁書辨論書上申書陳述書等

證人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書

審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹

枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚三錢

ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

但裁判言渡書ノ謄本ハ壹枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ壹

枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼

用ス可シ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償ス可キモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買収シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒収ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不倫罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四號

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙	壹枚	三錢
黒色印紙	同	五錢
赭色印紙	同	拾錢
茶褐色印紙	同	五拾錢
黃色印紙	同	壹圓
青色印紙	同	五圓
橙黃色印紙	同	拾圓
綠色印紙	同	拾五圓
嬌栗色印紙	同	貳拾圓

印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印ス可シ
右布達候事

○第十款 訴訟入費償却方

司法省甲第五號布達 九年四月二十二日

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事(本則中差添人ニ係ル件ハ十二年十月同省甲第貳号布達ヲ以テ一切刪除シ自今民事詞訟差添人ノ費用ハ訴訟入費トシテ請求スルコトヲ得サル旨)

第一條

訴狀並其外書類認料

一枚十六行十五字詰ニ付
十錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書

第二條

證人並ニ引合人差添人手當 一日ニ付五拾錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 (本條ハ九年四月同省甲第六号布達ヲ以テ追テ相違候迄執行ニ及ハサル旨)

證人並引合人差添人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五拾錢

第四條

證人並引合人差添入旅費

滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿壹里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠シ乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖

モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノ、爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五拾錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條 (本條ハ九年四月同省甲第六号布達ヲ以テ追テ相違候迄執行ニ及ハサル旨)
原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當
一日ニ付五拾錢

第七條

原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條

通辨雇料

一日ニ付三圓

右定限

第二條 同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算ス可シ

第九條

翻譯料

一枚ニ付十六行十五字詰
貳圓但シ壹枚以下モ同價

右定限

第一條 同シ

第十條

測量給圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ百間ニ付一尺ノ割

西ノ内一枚ニ付十錢

第二 長六百間迄百間ニ付五寸ノ割

同 拾二錢

第三 長千二百間迄百間ニ付三寸ノ割

同 拾四錢

第四 長六千間迄百間ニ付二寸ノ割

同 拾七錢

第五 長一万二千間迄百間ニ付一寸ノ割

同 貳拾錢

第六 長一萬二千間以上百間ニ付五分ノ割

同 廿四錢

一測量ニ及ハサル見取給圖ハ間數ノ長短ヲ論セズ大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内壹枚ニ付拾錢

第十條

使賃

滿一里毎ニ拾錢一里未滿ハ五錢

但シ歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣ハシタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノモノ掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第拾二條

郵便並ニ電信料

定 價

右定限

第拾一條ニ同シ

第拾三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又(町村)役場ニ納ム可キ評價人鑑定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費臨時計算ヲ以テ定ム右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

司法省丁第壹號達 十一年一月 日

明治九年四月甲第五号ヲ以テ訴訟入費償却規則及布達置候處右ハ再後各國公使ニ談判ノ次第有之ニ付當分外國人民ニハ施行難相成候條此旨可相心得候事(本号達ニ十一年一月同省丁第二号達ヲ以テ左ノ但書ヲ追加セラル)

但各國ノ内已ニ該規則ノ通準行政ニ來候分ハ此限ニアラス
司法省丁第十號達 十一年三月 十四日

民事訴訟上ニ付人民喚出狀送達費用等余儀ナク一時裁判所ヨリ立
替渡シタルモノハ其時々直ニ詞訟人ヨリ取立ヘシ

但裁判落着ノ上ハ曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論タルヘキ事
右ハ爲念此旨相達候事

司法省丁第十號達 十二年三月 十四日

裁判費訴訟費ノ義ニ付別紙ノ通大審院へ相達候條此旨爲心得相達
候事

別紙

大審院へ達 明治十二年 三月十三日

裁判費訴訟費ノ義過般及答議候處右ハ取消シ別紙ノ通更ニ相達候事

別紙

(第一例)

初告ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (乙)入費ヲ拂フ

控訴ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (甲)ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ

(破毀) 上告ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (甲)ハ總テノ入費ヲ拂フ

(第二例)

初告ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 或ハ勝トモ

控訴ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (甲)ハ初告控訴ノ入費ヲ拂フ

(破毀) 上告ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (乙)ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マデノ乙ノ入
費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返スヘシ

(第三例)

此例ハ大審院ニ於テ破毀シタル後第二ノ
上等裁判所ニ移シタル場合ナリ

此時負者ハ初告ト第一控訴ト第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フ
ヘシ上告入費ニ至テハ其ノ上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者

(括弧内朱書)

ハ之ヲ拂フヘキニ非ス

司法省丁第二十八號達 十二年十一月十一日

訴訟入費云々ノ義十一年丁第四十四號ヲ以テ相達置候處左ノ通改達候條此旨可心得事

訴訟入費ハ曲者ヨリ直者ニ弁償スヘキハ當然ノ事ナルニ付裁判言渡ノ節ハ必ズ曲者ノ辨償ニ歸スヘキ旨言渡スヘシ

○第十一款 訴訟代人

第壹號布達 十七年一月二十四日

明治十三年(五月)司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付己ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ニ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ

但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當

ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可

右布達候事

明治十七年一月廿四日

太政大臣 三條實美
司法卿 山縣有朋

○第十二款

裁判上勅奏官及華族并
判任以下呼出方

司法省丁第八十一號達 十年十月三十一日

大審院 諸裁判所

本年第七十一號布告ヲ以テ六年第四百五號布告被廢候ニ付勅奏官及ヒ華族ハ民事裁判上其家令執事ヲ喚問スヘシ若シ其本人喚問イ
タサス候テハ事實差支アル場合ニ於テハ時々奏請ヲ經テ喚問スヘ
シ候條此段爲心得相達候事

但勸解ニ付喚出ノ節モ同様タルヘキ事

司法省第八十九號達 六年六月八日

裁判上ニ於テ諸官員ノ内相手取ラレ且引合等有之呼出シニ及ヒ候節判任以下ニテモ是迄其所轄省ヲ經テ本人ニ相達來候有ハ全ク一身ノ私事ニ係リ候儀ヲ一々其省ヲ經由致候テハ諸事淹滞ハ不及申自然種々ノ不都合ヲ生シ候ニ付以來裁判上呼出ノ儀ハ判任以下ハ直ニ之ヲ達シ其所轄省ヘハ本人ヨリ届出候様可致此段相達候事

○第二章 詞訟權限

○第十三款 離縁ノ訴訟

第六十二號布告 六年五月十五日

夫婦ノ際己ムヲ得サル事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯シモス之カヨメ數年ノ久キ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權利ヲ妨害スル者不少候自今右様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ

内附添直ニ裁判所ヘ訴出ノ苦候事

○第十四款 負債者失踪後ノ訴訟

第六號布告 八年一月二十日

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ探上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相取メ候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定期滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツ可キ事

第二條 債主未ク負債者ノ失踪ヲ知ラス定期滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届ク出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長ニ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ヲサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ満月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

○第十五款 行政上處分不服者出訴方
 第二十二號布告 十五年五月十日
 課税ニ關スル處分ニ就キ不服アリテ出訴セントスル者ハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領收証書ヲ添ヘ其翌日ヨリ六十日内ニ訴出ツ

ヘシ

但納税期限前訴出テ訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課額ヲ上納ス
 へシ

右奉 勅旨布告候事

第七十四號布告 十五年十二月二十八日

備荒儲蓄金及區町村會若シハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年(五月)第二十二號布告ニ依ルヘシ(十五年五月第二十號布告ハ前ニ出)

右奉 勅旨布告候事

司法省甲第四號達 十四年八月五日

從來人民ヨリ郡區長及ヒ戸長ノ職務上ニ對スル詞訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨

布達候事

但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來候振合ニ可準候事

○第十六款 民事審理中告訴

司法省丙第九號達八 十一年十月 日

檢事 檢事ア各縣

民事審理中及ヒ裁判宣告後該事件ニ付刑事ノ告訴ヲ爲シタル場合民事ノ審理ヲ中止シ又ハ罪証明白ナルキハ裁判執行ヲ停止スヘキノ求メテ爲ス可シ此旨相達候事

但シ本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ一切取消候儀ト心得可シ

○第十七款 民刑附帶ノ裁判

司法省丁第七十四號達八 十年十月 日

大審院 諸裁判所

本年丁第六十號達ハ取消更ニ左ノ通相達候事

刑事ニ附帶シテ起ル民事ノ賠償ハ其性質ハ全ク民事ナリト雖モ刑事裁判官其處分ヲ行フハ其便ニ從フナリ故ニ民事ノ裁判ニ付不服ノ者ハ民事ノ手續ニ據ルヘキ儀ト可相心得此段爲念相達候事

○第十八款 無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人

第七十三號布告 十四年十二月 十八日

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

一 未丁年者

二 妻タル者

- 三 白痴瘋癲人
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
 - 法律ニ定メタル代人
 - 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時
右奉 勅旨布告候事

○第十九款 民事事上告ニ係ル裁判ノ再審

第四十九號布告 十年七月六日

民事刑事ヲ上告シテ己ニ裁判ヲ經タル者司法卿其裁判ヲ允當ナラ
スト思料ルヌ者アル時ハ檢事ヲシテ再審ヲ求メシムルコトヲ得ヘシ
右布告候事

○第二十款 金穀進借處分方

第六十三號布告 八年四月二十日

金穀其他借用証書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサ
ル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用

シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者へ償却可申付候條此旨
布告候事

但有証書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明証アルハ此限ニア
ラズ

司法省丁第三號達 十三年二月
十二日

大審院 諸裁判所

連借証書處分ノ義ニ付甲號ノ通熊谷裁判所ヨリ伺出候間乙號ノ通
内訓及ヒ候條爲心得此旨相達候事

甲號

熊谷裁判所伺 明治十三年
一月二十日

甲乙丙ト連借証書ノ内甲ハ東京乙ハ長崎丙ハ箱館等各所在ヲ異ニ
セル者アリ右ハ明治八年第六十三號公布ニ照セハ失踪死亡等ノ事

故アルニ非レハ債主之レヲ訟求セントスルニハ斯所在ヲ異ニセル
者ト雖モ其負債者ハ一同へ對シ訟求セサルヲ得サルモノ、如シ若
果シテ然リトモハ連借証書ニシテ別段ノ約條之レ無キ分ハ何レモ
保証人ノ義務ト取テ別ナキモノニ似タリ然レモ右ハ明治十年六月
仙臺裁判所伺御指令(民事部第廿六號十一葉見合)ノ意ヲ推考スレハ
債主ハ撰ム所ニヨリ其一名又ハ二名へ對シ全部ノ請求ヲ爲スモ亦
妨ケナシト雖モ現ニ被告セラレタル一名又ハ二名ニ於テ他ノ連借
者ノ召喚ヲ乞フ場合ニ在テハ又召喚セサルヲ得サルモノ、如シ然
ルニ是等一々召喚セシ上ニ非レハ審理判決スルヲ得サルモノトモ
ハ裁判上頗ル不便ヲ生シ徒ラニ夥多ノ年月ヲ費スノミナラス債主
ノ損害モ亦擲ナカラス畢竟分借ノ員數ヲ明記セサル連借者ハ素ヨ
リ保証人ノ義務トハ全ク其生質ヲ異ニスレハ各自ニ其全額ヲ負擔

スヘキ義務ナシトモ亦謂フ可カラス左スレハ債主ニ於テ右連借人
ノ内現在スル一名又ハ二名ヲ相手取出訴セシキ被告ニ於テ他ノ連
借者ノ召喚ヲ求ル際裁判官ニ於テ其求メニ應シ連借者ヲ召喚スル
モ無益ノ時日ヲ經過スルノミコテ現在ノ被告ニ全額返辨セシムル
モ不都合之レ無モノト思料スルキハ直チニ其全額ヲ償却セシメ可
然義ト存候得共右ハ前顯第六十三号ノ公布ニ牴觸スルノ疑議有之
候間一應奉伺候至急仰内訓候也

乙号

内訓 明治十三年
二月九日

連借証書處分ノ義ニ付伺ノ趣明治八年第六十三号公布ノ主旨ハ借
用証書中數名連印各自分借ノ員數ヲ記セサル分ハ右連印 失踪又
ハ死亡シテ相續人無キ者等有之ハ限リ現在セル數名ノ者ヘ償却

可申付トノ義ナレハ獨リ一名又ハ二名而已ニ對シ全額ヲ請求スル
コトヲ得ヌ必ス訴答文例第八章第二十五條ニ照準スヘシ(訴答文例ハ
款ニ詳出ス
參看スヘシ)

但仙臺裁判所ヘノ指令第二條ハ援引不相成候事

○第二十一款 償却無期限金穀貸借處分方

第十號布告 六年一月
十三日

金穀貸附証文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ証書
取置後日訴出ツルコト於テハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月ノ内濟方可申付事
但從前今後共無年期貸附中内証屢々返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ
至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不
動産ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

○第二十二款 融通使用ヲ爲サ、ル等ノ明文ナキ預金穀處分方

第二十七號布告 七年三月四日

預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲
サハル等ノ明文ナキ分ハ出訴候共本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同
様ニ裁判可致候條此旨布告候事

○第二十三款 金穀等借用証書ヲ他へ讓渡ス者書換方

第九十九號布告 九年七月六日

金穀等借用証書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ証書ヲ書
換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡証書有
之ハ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事
但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

○第二十四款 証據立

第二百十二號布告 六年六月十四日

來ル七月十日以後ノ証書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記
載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ畧記シタル時ハ裁判
上証據ニ不相立候事 本號布告本文ノ主旨ハ八年二月司法省甲第一
號布達ヲ參看スヘシ即チ同名該布達ハ次ニ出
司法省甲第一號布達 八年二月
二十七日
明治六年第二百十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ畧記シタル諸
証書類及ヒ公私文書等ハ裁判上証據ニ不相立旨布告相成候ハ其証
書全ク証據ニ不相立ル儀ニハ之レナク只其年月日ノ早晚ヲ定ムヘ
キ証據ニ相立サル儀ニ候條右等ノ証書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハ
ラス其記入ノ事件ニ付訴訟ニ及フハ取揚ケ裁判ニ及フヘシ候條
此旨布達候事

第五十號布告 十年七月七日

諸証書ノ姓名ハ必ズ本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スル

不能ハサル者ハ他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ必ス其實印ヲ押スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名ノ傍ニ其代書セシ事由ト己ノ姓名トヲ記シテ實印ヲ押スヘシ(十年九月七日第六十四號布告ヲ追加セラル)

但シ本文諸證書トハ契約ノ證書金穀地所建物貸借賣買讓與并預リ證書等凡テ民事上相互ノ契約ニ係ルモノヲ云フニ限ルモノトス

第百八十四號布告 六年五月三十一日

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日証據トナスヘキモノヘ自印相用可申事

第七十六號布告 九年五月二十二日

華族ノ輩金穀貸借証文及ヒ其他ノ契約書ニ家令家扶ノ名ヲ用ヒ何

家何局等ノ印ヲ捺セシ慣習有之處自今都テ本人ノ名印ヲ用ニ可シ若シ本人ノ名印ヲキモノハ其効無之儀ト可相心得此旨布告候事

○第二十五款 訴訟ノ取捨

司法省第六十九號達 六年四月二十八日

爾來郵便等ヲ以テ訴狀差出候者往々有之右ハ牀裁ニ於テモ不都合ニ涉リ實際ニ於テモ裁判難料成候ニ付以來右等ノ書類差出候節ハ一切不取上其時々燒捨候條此旨相達候事

司法省丁第二十九號達 十年四月五日

上等裁判所

地方裁判所

從來目安糺シト云成例アリテ出訴ノ起頭被告ノ答辨ヲ俟タス直ニ受理不受理ヲ判決スル等ノ一有之候處右ハ廢止可致候條此旨相達

候事

但シ大審院ニ於テ願訴ノ下調ヲ爲スハ此限ニテラス
司法省甲第三號布達十四年三月四日

刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省ニ對シ歎願或ハ再審願ト唱ヘ書面
差出候者往々有之候處有ハ因ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指
令ニ及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

第三章 身代限

○第二十六款 華士族平民僧侶身代限處分方

第百八十七號布告五年六月二十三日

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相違候事
但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共男女ニ通宛

一夜具男女一通宛

一本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等
其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸
主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入
札致サセ(村助)役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム
ヘキ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用サル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四

合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具各一通

華士族身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類

一家祿(本項ハ五年第三百二十七號布告ヲ以テ取消ス)

但人口ヲ量リ年々飯米ヲ引殘シ其餘分無キ歟或ハ不足ノ者ハ

其半高ヲ返金濟迄金主ヘ渡サセ候事

一大小類 男子一人ニ付各一腰宛

一冠服 男子一人ニ付各一通宛

一時服若替共 男女共各 二通宛

一夜具 男女共各 一通宛

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器

械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ
其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入
札人ト共ニ入札致サセ(村町)役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ
以テ其價ヲ定ム可キ事

一鍋釜及炊具類 各一通

右身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場并ニ本人家宅ヘ揭示
ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取札ノ上可處置事

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未ダ代價ヲ拂ハサル
分ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラズ

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物

品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過クヘカラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前并ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ(村町)役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ヘ差出スヘシ

第八十八號布告 六年三月五日

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左ノ通被相定候條此段相達候事
僧侶身代限規則

抵償トシテ差押ヲ可ラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一建物

法用ニ必要ナル箇處

但木堂等ヘ建添候トモ榮耀ニ属スル箇所ハ此限ニアラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物并法用ニ必要ナル部分

一法衣(寺主並所化及尼共各一通宛)

一時服着替共(寺主並所化及婦女共各二通宛)

一夜具(寺主並所化及婦女共)各一通宛
 一鍋釜及炊具類各一通
 一木八職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク
 等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ
 (華士族平民身代限規則ハ五年第百八十七號布告ニシテ即チ前ヘニ出ス參看スヘシ)
 第八十九號布告 六年三月五日
 今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分并ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相續リ置可申候
 一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分并ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
 一右二帳ニ部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上并ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ
 右ノ通相達候事
 第七十一號布告 七年七月三日
 明治六年(五月)第百八十一號布告身代限揭示案左ノ通改正候條此旨布告候事

何町村

何之誰

右ノ者儀何(町村)何ノ誰ヨリ何々(其事由ヲ)揭ク(出訴)ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ

當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所へ訴出ツヘシ
右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

○第二十七款 同居ノ子弟或ハ別居等財產ヲ異ニスル者身代限處
分方

第二百七十五號布告 五年九月十八日

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家
督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財產ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借
受候分其証券中本家ノ戶主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ
財產ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滯
訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其
財產ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達
候事

○第二十八款 身代限ヲ爲ス者へ對シ貸金數其他義務ヲ得ヘキ者

定約未期限內出訴處分方

第二百五十二號布告 六年七月十七日

負債者身代限ニ遇フ節其者へ對シ貸金數其他義務ヲ得可キ者定約
期限未滿內ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金數又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿內ニハ訴出ル
ヲ許サ、ル規則ナレヒ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未
滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿內ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權
利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ルヲ得ヘシ

第三條 請入証人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟可
致ノ明文之レアル証書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣金ノ

分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人証人ニ掛リ之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ(本條ハ八年第三百二號布告請人証人辨償規則ヲ參照スヘシ即チ第三章第三十欸ニ詳出ス參看)

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セシト欲スル片ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之レヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル債主ハ

右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルコトヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲ストテ拒ムヲ得可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

第五十三號布告 八年四月十日

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ與書割印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所ヲリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○第二十九款 身代限ヲ爲ス者ヨリ他ヘ金穀貸附ノ証書アル者處

分方

洞法省第二十三號達 七年九月 日

各裁判所

各府 縣

金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能サル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人ヘ貸附置タル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之左ノ通改正候條此旨相達候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸附置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主ヘ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其

証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事
但シ定約期限ノ証文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭
者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨
申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸附置キタル
金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致クサセ落
札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トへ金高ニ應シ
配當シソノ落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分ス
ヘキ事

但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘ
キ事
第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ

受取リタル時ハ其金員中ヨリ己ノ受取ルヘキ金高ト之レヲ受
取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文ニ記載シ
タル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返
シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ
金ヲ受取ントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限ニ遭
ヒ該証文ヲ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ
証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ
部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所
ヨリ受取ルヲ得ヘキ事
但此時裏書身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於
テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ証書ヲ一綴ニシテ下附スヘ

第六條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時証文ニ記載シタル債主即チ該ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金數ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

証文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年号月日身代限申付候ニ付此証文ハ入札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ某府縣管下某國某郡某町村何ノ誰ヘ相渡候條此證書ノ金額ハ右何ノ誰ヘ濟方致候上其段當裁判所ヘ可届出事

年號月日

某裁判所

○第三十款 請人証人辨償方

第二百二號布告 八年六月八日

明治六年(六月)第九十五号布告金數貸借請人証人辨償規則本年十月一日ヨリ左ノ通改正施行候條此旨布告候事(本號布告本文中八年以テ改正加除セラル即チ次ニ出ス參看スヘシ)

金數貸借請人証人辨償規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節其不足ノ分請人証人ヘ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人証人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主并ニ(請人証人)ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人証人ヘ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代付申付猶不足相立候ハ、(請人証人)ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ
離形ノ通裁判所ニ於テ其ノ原証文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ヘ可
相渡置事

裏書離形

第一條ノ節書式

裏書シ元利金何百何拾圓相滯ルニ付借主何ノ誰身代限申付ル處
不足相立(請人証人)何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百
何拾圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何拾圓ハ(借主)何ノ誰(請人証人)
何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致モノ也
一 年 月 日 某裁判所印

第六條ノ節書式

裏書シ元利金何百何拾圓借主何ノ誰(失踪死去跡相續人無之ニ付

(請人証人)何ノ誰ヘ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百何拾圓ニ相
成ニ付右受取殘リ何百何拾圓ハ(請人証人)何ノ誰ハ勿論其相續人
ニ至ル迄身代持直次第皆濟可致モノ也

某裁判所印

第百二十一號布告 八年七月
二十二日

本年(六月)第百二號金數貸借請入証人辨償規則布告本文中施行ノ二
字ヲ削リ且候條ノ下ニ同日以後借用証書ヘ加印候者ハ改正ノ通
可相心得ノ二十二字ヲ加ヘ候條此旨布告候事

但右規則第二條ノ節書式文中失踪ノ二字逃亡ト改正候事

○第三十一款 貸下金諸上納金等未納者身代限ノ際處分方

第十二號 十五年二月
四日

貸下金其他諸上納金未納ノ者他ノ負債ノ爲裁判所ニ於テ身代限ノ

處分ヲ受ル時ハ自今左ノ通處分スヘシ此旨相達候事
 貸下金其他諸上納金未納ノ者裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ル
 時ハ其徴収ヲ取扱フ官廳ニ於テ通常公文用紙ニ未納ノ金額ヲ記
 載シ証書ノ寫ヲ添ヘ之キ其裁判所ニ請求スヘシ裁判所ニ於テハ
 該請求ノ金額ニ就テ負債者異論ナキ時ハ身代限ノ配當金不足ア
 ルキハ定例ノ通証書ニ裏書ノ上其裁判所々在ノ郡區長ニ交付シ
 郡區長ハ之ヲ其管廳ニ送達スヘシ

○第三十三款 身代限ノ際區入費取立方

司法省第七十号達 九年十月十八日

身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀ニ付別紙之通御達有之候條爲心
 得此旨相達候事

別紙

別紙内務省伺身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀朱書ノ通及指令候
 爲心得此旨相達候事

人民身代限處分ノ節區入費取立方之儀ニ付伺

人民身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀ニ付各縣ヨリ追々伺出候處
 區入費ノ儀ハ縣廳獄舍營繕費其他區戶長給料等人民ヨリ課出スル
 モノニシテ租稅同様一般ノ義務ナリ素ヨリ貸借上トハ判然差別有
 之儀ニ付身代限處分ノ節右取立方ノ儀ハ租稅同様先取ノ權ヲ有ス
 ヘキモノニ付示後右處分ノ節ハ先租稅府縣稅區入費ト順序ノ處分
 相成候方ト存候ニ付右之赴ヲ以テ再應司法省へ及協議候處同省ニ
 於テ地區入費ハ到底先取ノ權之レアルハカラスト申譯ニハ無之區
 入費ハ人民ヨリ之ヲ爲スヘキノ名義ニテハ先取ノ權ヲ有スヘキ筋
 ハ無之見込ニ付若シ先取ノ權ヲ有スヘキ見込ノ分ハ府縣稅ノ一部

相立候ハ、裁判上先取ノ處分ナスニ於テ差支無之赴答議相成候
然ル處區入費課出之儀ハ例ハ一ノ土地ヲ所有スレハ其地券ノ代
價ニヨリ幾分ノ租稅ヲ納メ幾分ノ區入費ヲ出スヘキ規則ニシテ人
民營業取締上等ヨリ取立候府縣稅トハ素ヨリ別種ノ者ナリ然ルチ
府縣稅ノ一部ニ相立候筋ハ無之儀ニ付前陳ノ通身代限處分ノ節先
取之權ヲ有スヘキハ勿論其順序ニ於テモ第一租稅ヲ追シ亞ニ府縣
稅亞ニ區入費ト順序之處分相成候方至當之儀ト存候條至急何分ノ
御裁下有之度候也

明治九年九月廿六日

內務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿代理

右大臣岩倉具視殿

朱書

伺之通

明治九年十月十二日

內務省乙第八十六号達 二十年九月二十二日

府 縣

人民身代限ノ節區入費ノ儀ハ國稅縣稅ニ亞キ先取ノ權有之候得共
自然身代限ノ上尙區入費ノ不足有之候共身代持直次第償却致サセ
候ニ不及其區ノ損失ニ可相立此旨相達候事

○第三十三款 身代限ノ際財產隱匿スル者處分方

司法省第六十八號達 九年十月十四日

身代限ヲナス者詐偽ノ所爲ヲ以テ債主ノ損害ヲナシ及ヒ其詐欺ノ
所爲ヲ助ケ爲ス者ハ固ヨリ刑法ニ於テ其罪ヲ問フヘキハ兼テ心得
可有之候得共尙ホ爲念此旨相達候事

司法省丁第五十一號達 十年七月十四日

詐偽罪處分ノ儀ニ付甲号ノ通東京裁判所ヨリ伺出ニ付乙号ノ通太政官へ上申シ御裁令ノ上丙号ノ通及指令候條此段爲心得相達候事
甲号

東京裁判所ヨリ何明治九年十二月廿六日

詐偽罪ノ儀從來該犯ノ情狀ニ依リ各取財坐贓不應爲等ノ律ヲ以テ處斷シ來リ候得共其詐偽ニ至テハ犯狀最多端適律ヲ擬スル殊ニ容易ナラス就テハ差向キ此一國ノ疑義兼テ相伺置度假令ハ別紙罪犯ノ如キハ何ノ律ニ擬スル方允當ニ可有之哉此段至急御教示ヲ奉仰候也

別紙

甲 兵 衛

一自分儀着渡世致シ何町ニ住居罷在候處近來追々困窮ニ迫リ候ヨリ明治八年二月中所持ノ家作抵當ニ致シ何町乙兵衛受人ニテ何町一助ヨリ金五拾圓借受猶又明治八年四月中右家作抵當ニテ何町丙五朗受人ニテ淺草何町二平ヨリ金五拾圓借受其他所々ヨリ借財相嵩己ニ明治八年七月中何町丁吉ヨリ借金五拾圓相滯公訴相成身代限濟方可致場合ニ至リ前書一助外一人ヨリモ追々返濟方催促受候ニ付忽然不良ノ心ヲ生シ右抵當ノ家作ハ其以前既ニ他へ賣渡居ル姿ニ取捨へ置候ハ、假令公裁ニ相成ルモ糶賣ノ御沙汰ハ相違レ可申尤追テ身上持直次第債主へノ濟方ハ何レモ可相成ト何町何丁目三吉妻某ハ元召仕候緣故ノル者ニ付同人方へ兼テ賣渡居候赴ニ致ス可ク存シ何町戊左衛門ハ本家ノ儀ニテ家事向萬端相談モ致シ候間右ノ赴咄聞候處不宜儀ニハ候得共

一四四
兎ニ角身上向取續相成候様可致旨相答候間則自分三吉方へ罷越
候處同人ハ留守ニテ妻某へ其段申入候處異儀ナシ承諾致候ニ付
明治七年十月廿五日代金三百五拾圓ニテ賣渡シ置候積リニ申合
置其後右賣渡証書戌左衛門ニ認貫賣主甲兵衛証人ハ前書丙五朗
ニ致シ然シテ右証書ハ自分方ニ竊ニ差置候處其後反古ニ致シ候
哉ニテ唯今見當リ不申右賣渡ノ旨赴ハ其節代言ニ相頼候何町四
助ヨリ民事課へ申立置候處前書二平一助ヨリモ出訴相成候得共
右ノ次第故家作ハ相除丁吉二平ハ纔ノ身代配當金ヲ以テ濟方致
シ一助ハ身代配當ニ不加新規月賦證文ニ相改メ夫々解訟相成候
ヨリ明治八年十二月ニ至リ竊ニ右家作何町五助へ代金貳百拾圓
ニ賣渡前書戌左衛門俸何某名前ヲ以當住居へ轉宅致候處明治九
年一月九日右始末前書二平代言人何村何某ヨリ御訴申上候ニ付

猶被召出御糺受候處前文ノ通五助へ賣渡候ハ三吉ヨリ賣渡候儀
ニテ未ダ家作所有ノ儀同人名前ニ不書替故甲兵衛名前ニ候得共
全ク三吉賣主ノ赴ニ申立同人御糺受候テモ同様申口ヲ合セ取繕
ヒ申立候得共彼是不都合ナル處ヨリ遂ニ民事課ヨリ檢事局へ移
シ刑事課へ求刑ノ上追々御糺問ヲ蒙リ然ルニ明治九年五月十九
日既ニ三吉ヨリモ事實白狀致シ候ヨリ前段詐偽ノ始末發露ニ及
ヒ候事

乙號

女取官へ上稟

身代限ノ際債主ヲ書スルノ意ヲ以テ現在ノ財産及ヒ貸與ノ財産ヲ
藏匿漏脱シ又ハ詐テ負債ヲ假飾スル者ハ他人ノ財産ヲ盜取奪却ス
ルニ非ズ其元來其負債辨償スヘキ爲メ自己ノ財産ヲ各債主ニ

投寄シテ自ラ其財産支配ノ權ヲ失フタル者ナリ然ルニ他方ニ藏匿脱漏スルカ如キノ類ハ詐欺取財ノ律例ニ擬シ處斷可然ト思考ス抑詐欺罪犯シ者其情狀百端ニシテ一道ヲ以テ盡ス可カラスト雖モ其情意ヲ原スレハ詐欺ノ所爲ニ歸セサルナシ然ルニ右等ノ類律例ニ正條ナキヲ以テ處斷上往々不都合アルヲ免レス因テハ右律例御創立ノ發起創上京ノ目的ナリ然ルニ別紙東京裁判所伺口供案ノ如キハ前陳ノ詐欺云々ニ雜適スル者ニ付差向キ右等ノ類ハ詐欺取財ヲ以テ處斷スル旨指令可及ト存候此段相伺候也

右裁下ノ上左ノ通指令ス

丙號

指令 五月十九日 伺ノ趣詐欺取財ヲ以テ處斷スル旨

○第三十四款 諸坑業縁人身代限處分中停業

第四十九號布告 九年四月十五日

諸坑業縁ノ者身代限處分ヲ受ケ候節ハ右處分相濟候迄稼業不相成候條此旨布告候事

○第四章 雜則

○第三十五款 民事上證據物取扱方

司法省第十四號達 七年七月九日

聽訟上原被告ヨリ差出ス處ノ證據物ハ其裁判官見認メ有無且取捨ノ振合ヨリ後來ノ裁判ニモ差響ノ筋ニ付今後出訴ノ者之レナル事ハ事件採用不採用ヲ論セス其差出ス處ノ證據物本紙ニハ總テ年號月日番號判事誰或ハ令參事誰見認メタルヲ記載シ押印可致此旨相達候事

司法省丁第二十五號達 十三年十一月十一日

本年當省丁第八號違左ノ通改正候條此旨相違候事
明治七年第十四號ヲ以テ聽訟上原被告ヨリ差出ス處ノ證據物云々
相違置候處公債証書地券等ハ記名檢印スヘキ義ニ無之候條此旨爲
心得相違候事

○第三十六款 利息制限法

司法省第四十三號布達 六年三月二十五日

預メ金數

賣掛代金

諸職人手間代

地代

店賃

立替金數

敷金

證據金

受賃金

手附金

小作金數

村入用ノ割合金數

雇人給金

飯料

諸品ノ損料

無利息貸金數

右ノ類ニテ金數等可相渡期限ニ臨ニ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日
且期限ナシシテ金數入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方
ノ掛合ヲ受テ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ雙方示
談ヲ以テ利息ノ歩合ヲ定メ證書ヲ受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナシ
シテ追テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九拾貳號布告ニ因リ處分致シ
候條此旨可相心得候事(本號布達本文中六年第九拾貳號布告ハ十年
第六拾六號布告ヲ以テ利息制限法被定ニ依
テ消滅ス該六拾六號布(本號布達本文ヘ七年八月三十一日同省
告ハ即チ次ニ出ス參看) 第貳拾貳號布達ヲ以テ左ノ但書ヲ追加
但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限リ本文ノ處分ニ
及テ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ、ル分

ハ此例ニツラヌ

司法省第七拾四號布達 六年十月二十八日

明治六年當省第三拾八號金穀貸借利息ノ義裁判決定迄算計可致旨及布達置候處右ハ貸借ノ金穀返濟ノ日亦ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事

第六拾六號布告 十年九月十一日

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニメ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ廿二割百圓以上千圓以下百分ノ十五一割五分千圓以上百分ノ十二一割二分以下トス

若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高キ定メサレ共裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六(六分)トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金持利等ノ名目ヲ用ル者アルニ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルルハ債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキトコヲ約定スルコトソルニ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルルハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○第三十七款 契約証書解釋
司法省丁第七十五號達 十年十月
二十一日

大 審 院
諸 裁 判 所

契約証書解釋方法ノ儀太政官ニ相伺候處別紙ノ通御指令相成候事
付心得ノ爲メ此旨相達候事

裁判上契約証書解釋方法ノ儀ニ付上申
抑モ契約証書ナル者ハ雙方ノ權利義務ヲ定メ其赴旨目的ヲ確實ナ
ラシムルモノニシテ素ヨリ輕易ニ付スヘカラサルナリ然ルニ各人
契約ノ証書動モスレハ疎漏ニ流レ訴訟トナルニ及テ意義ノ解釋ニ
苦シム文意汎漫立言曖昧ニシテ契約ノ赴旨目的明確ナラサル者ア
リ意義兩端ニ涉ル者アリ其他地方ノ慣習ニ因リ文言ノ其赴旨ニ適

セサル者アリ裁判官タルモノ活眼以テ之ヲ解シ明察以テ其要旨ヲ
探ラサレハ裁判其當ヲ失ヒ冤ヲ吞ミ憾ヲ含ミ却テ人民ヲシテ冤屈
ニ沈セシム虞マサルヘケンヤ

現今裁判上ノ景況ヲ視ルニ特リ其文詞ニ拘泥シ其契約ノ主旨ヲ誤
リ或ハ文意ノ曖昧ナル者ハ概シテ無効トナスカ如キノ弊害アルヲ
免レサルナリ果シテ然ルルハ權利者却テ權利ヲ失ヒ義務者却テ義
務ヲ免ルルニ至リ雙方ノ權義ヲ錯乱シ各人ノ權利財産ノ安固ヲ妨
害スル實ニ鮮少ナラサルヘシ是ニ於テ道理ニ基キ便益ヲ測リ猶佛
國民法ノ法理ニ據リ契約証書ノ解釋法ヲ指示シテ裁判上ノ謬誤ヲ
豫防スルヲ目今ノ一大急務タリ
因テハ別紙ノ通疑シキ契約証書ノ解釋方法兼テ於當省議定イダシ
置キ斯主旨ヲ以テ伺出ソ向キヘ指令ニ及ヒ度又時宜ニ因リ各裁判

所爲心得相違候儀モ有之ヘク存候抑モ是等ノ事ハ事理ノ然ラシカ
ルヘカヲササル者ニ候得共爲念一應相同候條至急御裁令ヲ請

明治十年六月廿二日

司法卿大木喬任

右大臣岩倉具視殿

御指令

伺ノ趣ハ修正ノ通相心得ヘシ

明治十年七月十七日

別紙原案ハ之レヲ嚮ス

修正

契約書解釋心得

- 一 契約書ヲ解釋スルニハ其文字ノミニ依著スルヨリハ寧ロ其契
約ヲ爲シタル雙方ノ者ノ旨趣如何ヲ考察スヘシ

二 一個ノ條款ニ様ノ意ヲ帶ルルハ其契約ノ効ナカラシム可キ意
ニ之レヲ解スルヨリ寧ロ其効ヲ生セシムヘキノ意ニ之ヲ解ス
ヘシ

三 文詞ニ様ノ意ヲ帶ルルハ其契約ノ目的ニ最モ適シタル意ニ之
ヲ解スヘシ

四 文意ノ曖昧タルモノハ其契約ヲ結ビタル地方ノ習慣ニ從テ之
ヲ解スヘシ

五 習慣上通常記載スル條款ヲ契約書中ニ記セサルモ仍ホ之ヲ記
シタルモノト看做ス可シ

六 契約書中ノ條款ハ皆其全文ノ大意ニ從ヒ互ニ相解釋スヘシ

七 疑ノ場合ニ於テハ契約ハ其義務ヲ行フ可キ者ノ利益トナル様
之ヲ解釋ス可シ

八 契約書中ノ文詞如何ニ泛キトモ其契約ヲ結ヒタル雙方ノ者互ニ相思擬シタル可シト推知スルヲ得ヘキ者ヲ除クノ外ハ之ヲ包含セズ

九 義務ヲ解釋スル爲メ契約書中ニ一箇ノ事項ヲ掲ケタリトモ其契約上當然ニ包含ス可キ事件他ノ事項ヲ除去シタル者ト看做ス可ラス

○第三十八款 裁判上入札羅賣等取計方

第三十四號御達 七年三月二十日

従前布告中裁判上入札又ハ羅賣ノ定メ有之候處右處分ノ儀各地方ノ便宜ニ隨ヒ裁判官見込ヲ以テ兩様ノ内取計ヒ苦シカラス此旨相達候事

○第三十九款 治安及始審裁判所ノ權限

第八十三號布告 十四年十二月二十八日

治安裁判所及始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス
右奉 勅旨布告候事

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス

但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ付ラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及價額百圓未満ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

○第四十款 呼出期日遅不參處分方

第五號布告 十年一月十七日

凡テ裁判所ノ呼出ヲ受ケタル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スル時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ届出ルカ又ハ無届ニテ遲參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直チニ五圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
右布告候事

行現
民事訴訟必讀終

○追加

甲第壹號告示 明治十七年三月五日

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用罫紙規則廢セテ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之ノト同尺度ノ紙ヲ用ヒ壹枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メラル割合ニ依リ書類認料ハ壹枚金貳拾錢翻譯料ハ壹枚金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ

右告示候事

全明治十七年二月八日出版御届
年三月廿四日刻成

編輯兼出版人

京都府平民

中井要平

下京區第十三組足
袋屋町十二番戶

定價金七拾五圓

發

東京銀座四丁目

博聞本社

兌

全 銀座瀧山町

報告堂

書

大阪本町四丁目

岡島真七

舖

全 備后町心齋橋角

吉岡平助

全 京都吉町四條上

田中治兵衛

全 東洞院三條上

村上勘兵衛

全 佛光寺町烏丸東三入

律書房

京都府調査掛御編纂

一 明治十三年京都府統計表

全一冊

定價金壹圓八十錢

一 全 明治十五年京都府布達要約

上下卷

定價金壹圓五十錢

判事補工藤重太郎校閱

蒲池平五郎編輯

一 古物商取締條例俗解

全

定價金十五錢

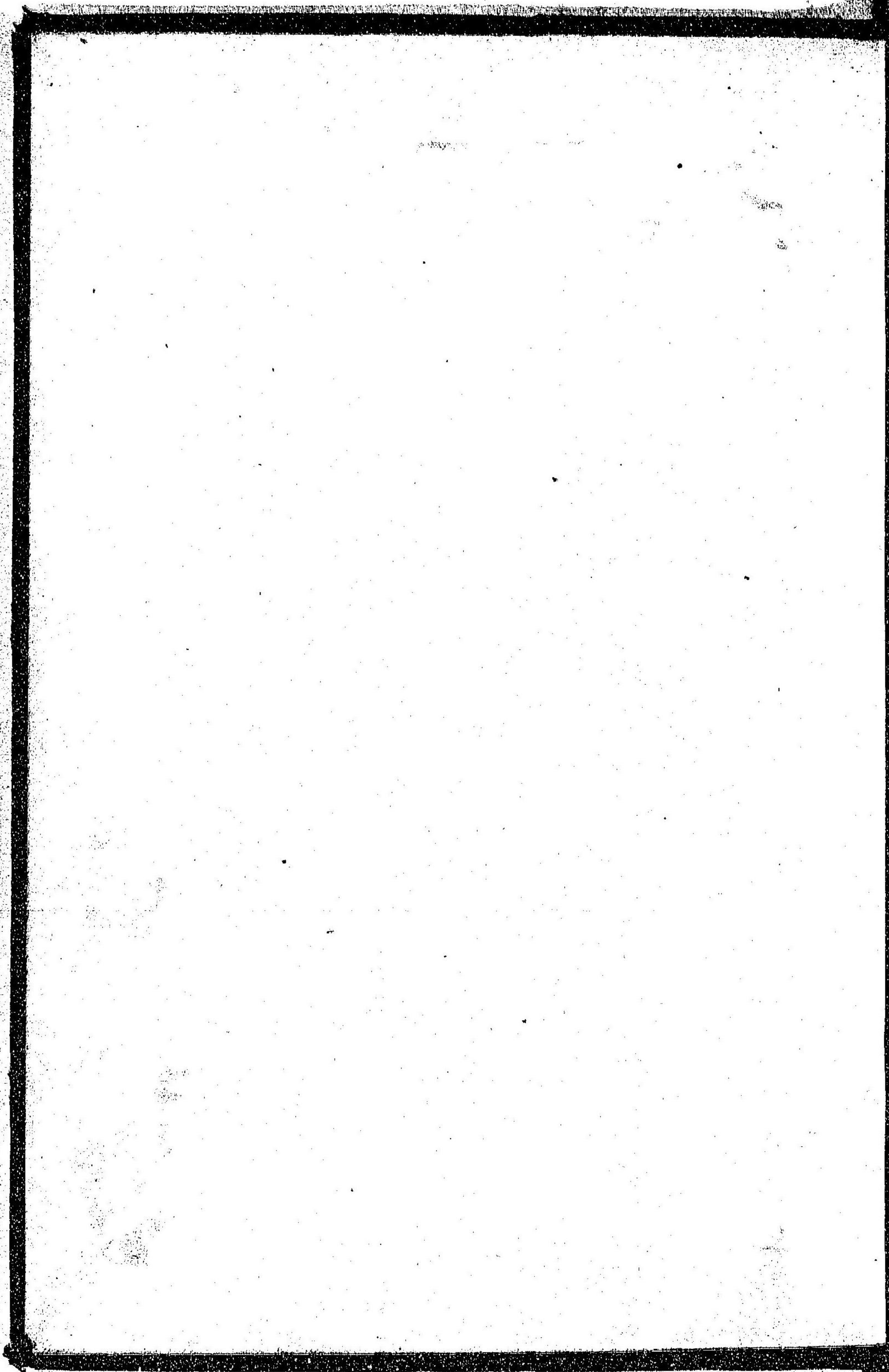
判事補澤正太郎校閱

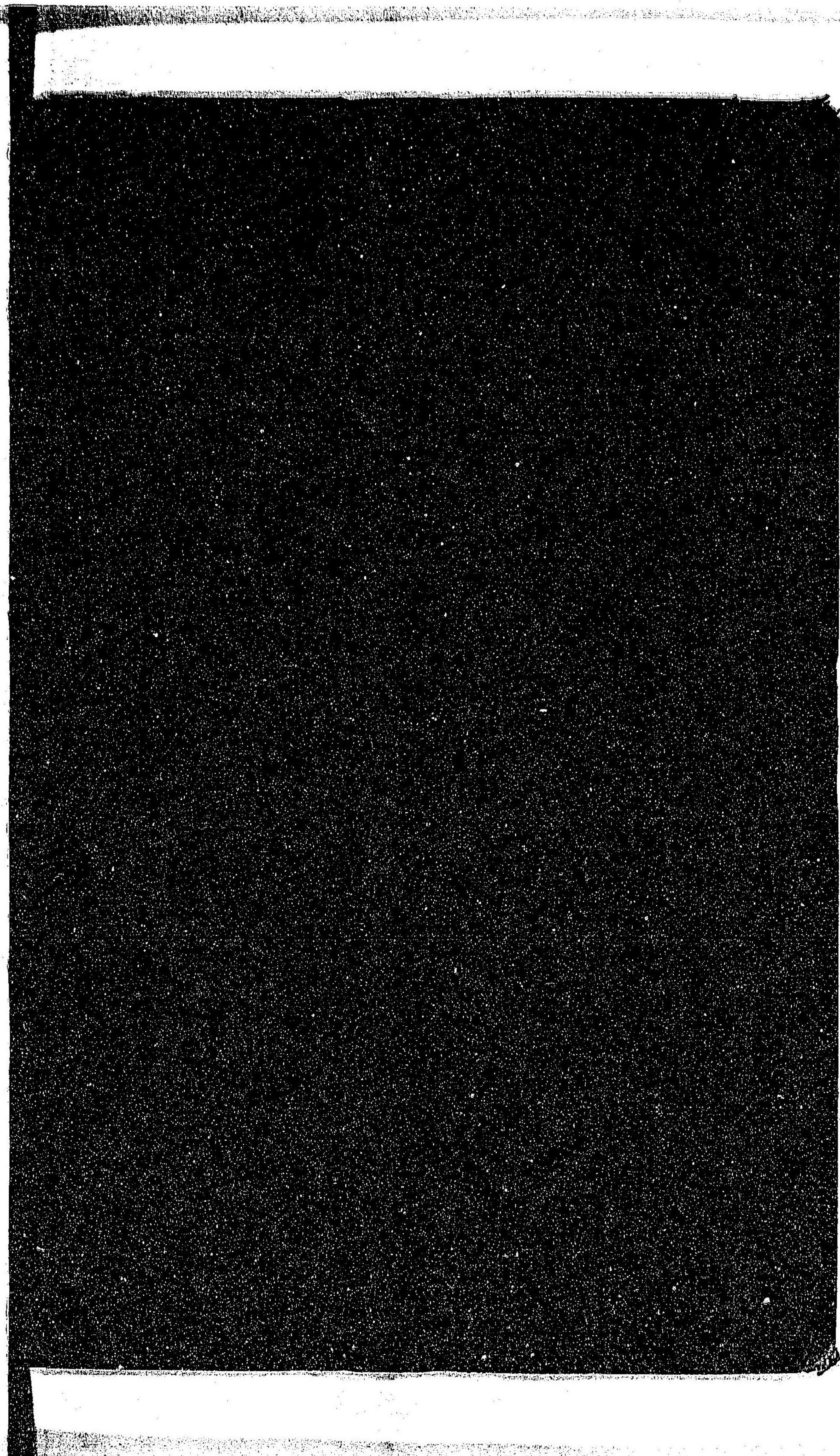
一 治罪法期限便覽

折本一冊

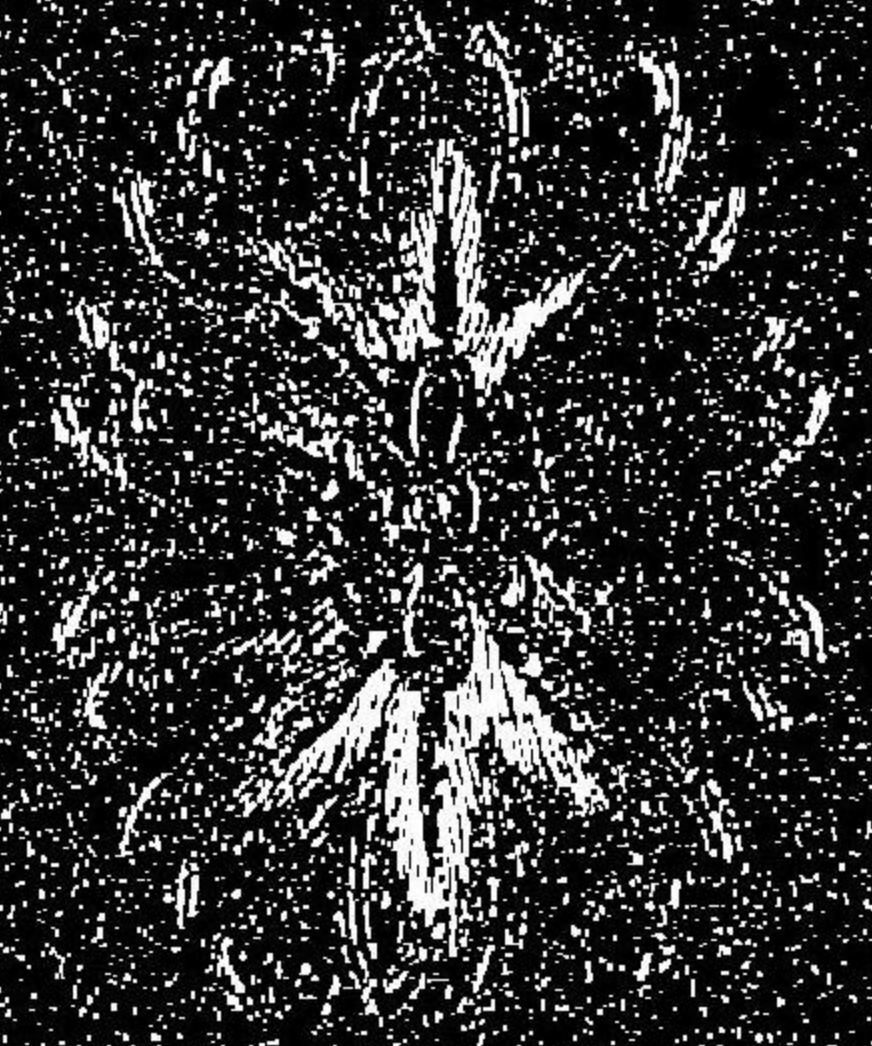
定價金十五錢

大阪大東日報社印行





3/0
2
84



特

036754-000-2

特15-446

現行民事訴訟必読

中井 要平/編

M17

BBS-0188



